

正法寺の七不思議

正法寺には、いにしえから「七不思議」が伝えられています。七不思議とは、どんなものなのか、その謎に迫ります。

1【飛竜観音】

別名「雨乞観音」と呼ばれています。曹洞宗の禅僧であり、高名な画人でもある雪村（雪舟の弟子）の作と伝えられています。この観音像に祈るとどんな日照りの年であってもたちまち雨が降ったといわれています。



2【八つ房の梅】

無底良韶禅師が水沢の姉体で、美しく満開に咲き誇る八つ房の梅を見つけました。無底良韶はその株を分けてもらい、本堂前に植えました。それが「大梅拈華山円通 正法寺」の名の起こりといわれています。現在その梅の木は枯れてしまい、見ることはできません。



3【子泣きの池】

昔、貧しい母親が子どもを育てることが出来なくなり、正法寺の池に捨てて死なせてしまいました。それ以後、夜になると池から子どもの悲しい泣き声が聞こえるようになりました。当時の住職はふびんに思っ、成仏を願いお経を唱えると、それ以来、泣き声が聞こえなくなったといわれています。



4【虎斑の竹】

正法寺の寺内に虎の模様のような斑の表皮をもつ竹が生え、ほかに類を見ない竹として珍しがられています。

5【片葉の葦】

無底良韶禅師の愛馬を埋葬したが、墓の周囲のアシが馬のたてがみのように片方だけにしか葉を付けなくなりました。また、源義家が山中のアシを刀で切って進軍しました。それ以来、正法寺周辺のアシは片葉になったと伝えられています。



6【文福茶釜】

みんなで福を分けあうという意味で「分福茶釜」とも名付けられています。茶席でお湯をくんでも、その量が減らないため、福を招く茶釜と伝えられています。また、この茶釜に蓋がないのは、正法寺が火事とき、鎖につないでいた茶釜は残ったのですが、蓋だけは山形の米沢にある寺に飛んでいったためといわれています。



7【慕弥の扇】

昔、亀井辰次郎という藩士が伊勢参りの帰りに扇屋の松坂屋に立ち寄ると、店の娘お鶴に一目惚れされました。お鶴は「ほやの（お慕いしておりますの意）扇でございます」と言って亀井に扇を渡しましたが、亀井に同行の藩士がやきもちを焼き「ほやの」とは「はいと（乞食）」のことだと嘘をつきます。怒った亀井はお鶴を斬り殺してしまいますが、後に「ほやの」の真の意味を知り、松坂屋を訪れてお鶴の位牌と祝言を挙げました。その晩からお鶴の亡霊が亀井のもとを訪れ、やがて二人の間に男の子が生まれました。その子は後に正法寺開山無底良韶禅師と伝えられています。



仏殿本尊 釈迦三尊坐像



本尊

如意輪観世音菩薩坐像

岩手県指定文化財（像高48センチメートル）

正法寺開山無底良韶禅師画像

岩手県指定文化財（72・6センチメートル×36・2センチメートル）



昭和 50 年代の正法寺。手前が庫裏、奥は本堂

曹洞宗本寺

「奥の正法寺」と呼ばれる大梅拈華山円通正法寺は、かつて福井県の永平寺、石川県の総持寺（明治40年横浜へ移転）と並ぶ日本曹洞宗三本山の1つでした。この正法寺は、JR水沢駅から南東に約12キロの山深い北上高地に抱かれて、ひっそりとただずんでいます。南北朝時代の貞和4（1334）年、無底良韶が東北地方

初の曹洞宗寺院として開いたのがこの正法寺で、無底良韶が新寺の造営を折願した康永4（1345）年から3年後のことでした。これに先立つ康永元（1344

）年、無底良韶は師の峨山紹碩から傳法を受け、日本曹洞宗の開祖道元禅師が中国から持ち帰り、峨山紹碩まで受け継がれた曹洞宗重宝の袈裟（僧伽梨）を授けられています。このことは峨山門派を無底良韶が継承することを示し、正法寺を開いた2年後の観応元（1350）年に崇光天皇から「出羽奥州両国における曹洞宗第三の本寺」として正法寺住職に紫衣（紫の僧衣）の着用が許されたのです。

正法寺が開き13年後の康安元（1361）年、無底良韶は跡を継ぐ門弟がいなまま住山14年で卒去、行年49歳と伝えられています。このため、総持寺住職となっていた師の峨山紹碩は、弟弟子の月泉良印に正法寺を継がせるとともに道叟道相も派遣しました。このとき正法寺

庇護を受け、主要伽藍の本堂、仏殿、山門の復興や修理を仙台藩が行うことになっていました。が、藩、正法寺とも財政が逼迫し、本堂や庫裏は火災後50年の歳月を費やして再建されました。しかし、仏殿と山門はついに再建されず今日に至っています。

禅宗の配置

現在の正法寺には、重要文化財の惣門、本堂、庫裡、鐘楼堂、市指定文化財の開山堂、小方丈を中心としたかやぶき屋根の土蔵や木小屋などのほか、山門と仏殿跡の礎石が残されています。これら現在の建物や記録な

どから復元される正法寺は、南北中心線上に山門、仏殿、本堂が、仏殿の左右に僧堂と庫院、山門の両側に浴室と淨頭、西浄、東司が配置される典型的な禅宗七堂伽藍となっています。さらに、南北中心線から東にややずれて惣門が配置され、現在の正法寺伽藍も中世の禅宗寺院の構造をそのまま継承していることが分かります。

新たな発見

曹洞宗第三の本寺とし、僧侶を養成する修行道場としての厳格で質素なイメージをくつがえす発見が「平成の大改修」でし

は「末代まで奥羽両州曹洞の本寺たるべし」とする書状（両国曹洞本寺峨山紹碩置状）を月泉良印に与えています。この置状は、正法寺が曹洞宗本寺の永平寺、総持寺に並ぶ東北地方の本寺（本山）であることを示したもので、正法寺の根本資料として現在も寺に残されています。無底良韶の正法寺開基と月泉良印の継承には、正法を奥羽に伝えようとする無底良韶の使命感と曹洞宗峨山門派の全面的な支援があり、曹洞宗を東北に広める拠点として正法寺が意識されていたと考えられています。そして、二代月泉良印の代には「月泉四十四資」といわれる弟子が輩出されるとともに、岩手県南部から宮城県を中心に、秋田、山形、埼玉、千葉県などに多くの末寺が開かれました。住

火災と再興

正法寺の歴史は、火災と復興の繰り返しでもあり、文安元（1444）年を最初に寛政11（1799）年まで6回の火災が記録されています。最後の寛政11年火災は、二代月泉和尚の400回忌法要の当日で、700人以上の僧が集まるなか庫裏から出火しました。このとき寛文5（1665）年再建の惣門と土蔵、宝蔵を残すだけで、ほぼ全山が焼失してしまいました。江戸時代の正法寺は仙台藩の



惣門脇に座すお地藏さま